

### 少年野球随想<sup>3</sup>

「ベンチウオーマー」

荒井義一

私の尊敬する球友の一人故・柄田一夫氏のことを書く。

そもそも船橋の少年野球は関東団地連盟加盟のチームが市内の子供会のチームに声をかけ結成したのが始まりである。

昭和35年市内に初めて前原団地が造成つづいて36年に高根台、42年習志野台国鉄官舎、43年夏見台、そして44年に若松、以後金杉台、緑台、行田、芝山とつづく。

団地建築法により災害に備えて近くに避難場所がなくてはならない。その広場を利用して草野球や少年野球チームが雨後の夕ケノコのようにぞくぞく誕生した。団地族とは見ず知らずの人間ばかりの集まりである。コミュニケーションにもいいし、勿論健康にもいい。

若松団地の若松ヤンガースは創立時、部員が140名もいた。遠征用のマイクロバスも持っていたし、少女チームもあった。

現在の南船橋駅前のグラウンド四隅にバックネットを張り、子ども達がうじゃうじゃとイナゴのように跳びはねていた。のを私は知っている。

“びっくりしたのなんの・・・”  
その印象は今も忘れない。

\*

柄田氏と私は昭和7年生まれの申年で、子供も同年だし趣味も酒、麻雀、カラオケと同じなのでウマが合いよく行き来していた。

ある日、彼はポツンとこう言った。

「荒井さん、私は野球は全然知らない。中学時代は陸上競技をやっていたが背が低いのと足が遅いので試合にはほとんど出してもらえなかった。ヤンガスではベンチウオーマー係りを引き受けた。うちには試合に出られない子がゴマンといるからね。その子たちのキモチはよくわかる。なんとか励ましてやるうと思ってる」

「……………」

私は絶句した。世の中には偉い人がいるものだと言った。

誰でも試合に出たい。ホームランを打ちたい。ファインプレーをしたい。勝利投手になりたい……………。その脚光を浴びることのできない子も大勢いるのだ。

「野球というのはね、9人だけでやっているのじゃないよ。ベンチにいて応援する子も、フィールドボールを拾う子も、ベースコーチャーもバットやヘルメットを並べる子もみんな同じに試合をやっているんだよ。少年野球は野球の入口だよ。この先、中学でも高校でも野球はあるんだよ。がんばれ！……………こんなことを毎週言っています……………」

\*

彼のカラオケの十八番（オハコ）の一つに題名は忘れたが

“また来る春がないじゃない”

踏まれ、踏まれてこぼれ散る

道の小草の、花でさえ

いつか花咲く、時がある“

この歌を聞くたびに私は胸が熱くなるのである。そして酒の量が嵩むのである。

蛇足だが最近、新聞広告のすばらしいフレズに感動した。新発売の焼酎の宣伝である。

レギュラーになれよ

なれなくても辞めるなよ

少年に真新しいグローブを渡すと

父は背中を向けて「しろ」を飲んだ

(平成18年2月15日脱稿)